

## いかに死を捉えるか

### 生と死

壬生台舜

この生と死、漢字にしますと生と死、あるいは、仏教的に申しますと「しじょうじ」というふうに読むわけです。生というのは生まれるとか、生きるというような意味ですが。死というのは息が止まって死んでしまつということですし、しかし、生と死という現象は、色々前提になる問題があります。例えば、死というものは医学的によどの時点から死というかというような問題があります。呼吸が止まり、且つ脳波が止まつてから死というのかどうか、どの時点から死というかということは医学的にも実は問題があるのです。従つて、渡しがお話ししますのは、どこからが死とか、どこからが生とかということになしに、私共人間が一般的に生と呼び、一般的に死と呼んでいる、そういう実に曖昧な理解ですが常識的に理解している、そういう意味で、生と死ということを考えていくことにします。

しかし、ご存じのようにお釈迦さまが出家された動機というのが、まあ、いろんな動機があるようですが、お釈迦さまの伝記である「仏伝」等によりますと、四門出遊のお話があります。つまり、生老病死という四つの問題意識から出発して出家したということがあるわけです。

そういうことで、仏教の当初からこの生老病死というのは、実は人間にとって非常に大きな問題になっております。この生老

病死というものを仏教でどう扱っているかということは、ある意味では仏教の中心の課題なんです。しかし、仏教文献を開きますと、非常に細かい議論が分量的に膨大な位に、大きな位置を占めておりまして、こういう中心的な問題が必ずしも、仏書の中に常に出てくるということではない状態になっております。しかし、今申し上げたように、これは仏教として非常に大きな問題なのです。

それから、日本仏教を考えてみましても、日本の仏教というのは、昔は二三宗五六派とか言っていました。マツカーサーが来てから独立が自由になりました。この頃はいろんな宗旨が沢山出ました。一三宗五六派どころではない、恐らく一〇〇派くらいになっていると思います。しかし、日本仏教のある断面から考えてみますと、薬師信仰、あるいは観音さまの信仰という現世利益を強調する一つの仏教の流れと、それから、阿弥陀さまを拝む浄土宗、真宗のように、来世のことをどう考えるかという流れがあります。つまり、来世の方は死後の問題ということになりますし、現世の方はこの生きておる生の悩みです。死の悩みと生の悩みというこの二つに対して、どのように応えているかというのが日本仏教の大きな流れであるわけです。従つて、日本仏教のそれぞれの宗派の御祖師さまはもちろんですが、多くの方々の中にもそういう生と死という悩みの告白が、必ず書かれておるのです。従つて、これを本当に理想的な形でお話しするには印度の仏教文献を残らず読み、且つ、自分の問題意識とからめまして、お話ししなければならぬと思います。実はこれは一生の仕事だと私自身は考えて

おります。

今日お話しするのは何か中間報告みたいなことになるのです。それから、また、私自身がこういう問題を考えますのは、私自身の個人的な理由もあります。今の私はちよつと見ると大変恰幅が良くて、昔、相撲でもとつたのではないかというふうに想像される方もあると思いますが、実は子供の頃は非常に病身でした。今でも覚えていますが、子供心に死にそこなつたことが何遍もある、そんなことで私がこうやって一人前の顔をしながら生きているのを見ると、小学校時分の友達に奇跡だと申します。

そんなことで、自分自身が非常に病身なもんですから、何か子供の時からそういうことについて、知らず知らず考えさせられておつたのです。しかも去年、丁度一年程前におなかを切りました。未だにその手術の予後は完全ではないのです。つまり、胆嚢を取つたせいで、少し肥りすぎ、胃袋が少々飛び出しているようなことでベルトをしていきます。ヘルニヤ・スタイルになっておるのです。そのようなことで、子供の時から今に至るまで絶えず、死ということに私自身がぶつつかっていました。そういう訳で、このような問題については割合に深く考えさせられるような生活経験をもってきたのです。

仏教のお話の前に、中国の有名な孔子さまが、論語の中に子路というお弟子さんとの対話がありまして、弟子の子路が孔子に鬼神（鬼の神）これは死神をいうのでしよう、鬼神とは何かと、それから死とは何かという質問をするくだりがあります。それに対して、孔子は死という問題について、「生が未だにわからないのに死なんていう

ことは分からないんだ」と答え、お前がそんな質問をしたって、そんなこと答えていても仕様がなからと言つて答えないままにおかれていゝのです。

その論語の中には、死というようなことがあんまり説かれていないというようにことを言われることもあるようですが、しかし、大体、中国人というものは非常に現実的な人間でして、まあ、日本人も現実といえば現実ですが、日本人よりも強く現実を肯定し、現実の生活を大事にするという、そういう国民のようです。生の立場を中心にしてものを考えている。不老長寿というようなことを追求するという次第です。民族的に死というような問題にはあまり触れることが薄いようです。

しかし、これも一般論で、必ずしもそういうことがいつも適応するというわけではありません。それから、又、現代人と申しましても、皆さんも現代人の一人、私も現代人の一人ですが、多くの現代人の考え方は、昔の日本人は、死を思え、とか、死を考へろ、とかいうようなことは絶えずいわれていたのです。しかし、現在はどつちかといえば、死を忘れる、というような風潮になっておりまして、死に直面しないで、むしろ死というものに対しては目をそらすような態度が、現代人の多くの方、特に若い方はそういう傾向が強いのです。

ということは、昔の方々、特に徳川期から明治くらいまでの人々は宗教的な意識の強い社会に育つておりまして、死という問題を切実に考え、ある場合には、この世の生活よりか、来世の生活の方が重要だというような、そういう宗教的な雰囲気の中に育つておつたのです。従つて、現代人の考

え方をずばり言えば、「生よこんにちは、死よさよなら」ということになります。一般的に現代人は死ということについて目をそらすという、まあ、意識が強いようです。意識ということが適当でないとする、そういうような傾向にあるのです。殊に、一方には社会福祉というような問題が取り上げられてきておりまして、病気とか貧困というような問題はある程度まで解決が可能であると。従って、自然科学の崇拜ということが非常に強くなりまして、宗教的なものの考え方というのが弱くなってきたというのが現状なのです。しかし、その社会福祉という問題が段々取り上げられて来るに従いまして、その中に一つの大きな問題として、老人問題というものが当然大きくウェイトを占めて参ります。

老人問題を考える時には必ず、この死の問題を避けることが出来なくなってくるのです。そういうことと、社会福祉がどんどん進んでおるにもかかわらず自殺が多いというような問題があります。自殺は新聞の統計などによりますと非常に多いので、私も驚いたのですけれども、とにかく、日本で二七分三三秒に一人ずつ自殺者が出るというようなことで、非常に自殺者が多いのです。

死因の順序で申しますと、昭和四九年には自殺は死因別の第八になっている。昭和三年からずっといいますと、七位から一〇位の間にいつもこの自殺ということが出てくる。昭和四九年度は約二万人の方が自殺をするというようなことです。そういうことで、福祉社会になっているにもかかわらず自殺が増えておるということが一つのようです。それから、もう一つは具体的な

問題としては安楽死という問題がございまして。これは皆さんの中でも否定する方と肯定なさる方があるようですが、九月十一日の新聞の意識調査によりますと、安楽死の肯定をする人が多いという調査も出ております。

しかし、実際に安楽死を肯定する方が良いかどうかという問題は、理論的には肯定し兼ねますけれども、お年寄りが一人で生活するような状態になり、あるいは、病気になるような惨めな状態になりますと、この安楽死を肯定するような考え方も分らないわけではないのです。

それが証拠には、去る六月ですが、NHKで安楽死ということが取り上げられ、老夫婦の話がありまして、旦那様が八〇歳くらい、奥さんが七〇歳いくつで、その奥さんはどこが大変有名な女学校を卒業された方ですが、もう長いこと旦那様が病気で寝ている、しかも働けないので生活保護で生活をしている。自分の旦那様ではあるけれども一〇年以上も世話しているので疲れてしまった。また、そういう生活保護を受けていることはありがたいけれども、そういうお金があるのならむしろ若い人に廻してもらった方がいんじゃないかということ、実感として述べておられたのです。

そういうことで、現代人は死に目をそらすとは申しましたけれども、その老人問題とか、安楽死とか、そういう具体的なことから、この死ということを考えざるを得ないように、だんだんできてきているように思います。その証拠には、例えば、昭和三九年には文芸春秋社から亀井勝一郎さんが、「中世の生死と宗教観」という本を出されておりました、その年の昭和三九年八月

に講談社から、東大の宗教学の主任の岸本英夫先生の「死をみつめる心」という本が昭和三九年に前後して出ている。その後ずっと、そういう本が出ていないんです。昭和四六年の四月に読売新聞社から「死ぬ瞬間」という、これはアメリカの、後でちょっとご紹介申し上げますが、医者がもう臨終だという状態になっている病人との面接を行ったもので、「死にいく人々との対話」という副題で出ているのが、これが昭和四六年の四月です。

それから、それから昭和四七年の三月に文芸春秋社から「人生の本」というので、「死をみつめて」という本が出ておりまして、前後して、筑摩書房から、「人生読本、死について」という、まあ、同じような本です。この頃から連続と出ておりまして、同時に高瀬広居さんという浄土宗のお坊さんで、現代評論家が「死」という本をエール出版社から出してあります。また、そのころに若い方は「存じだと思いますが、ちあきなおみの「喝采」という歌がありました。あの喝采という歌は、実は死という問題に絡んでいる歌です。昭和四六〜七年には、高度経済成長というような半面、社会福祉という半面に死というような問題が非常に取り上げられてきておるのです。

そういうことで、今日もややその続きにあるのでしょうか、本年の六月七月時分に、三橋一夫さんが「死を考えて生きる」という本を、エール出版社から出ております。その翌月、つまり七月には、日本教文社から「死の不安」という、これはマイヤーという人の本ですがその翻訳が出ておりまして、昭和四六年〜七年位から又、そういうような問題が取り上げられておる。そ

う社会的な一つの流れによって、この東大仏教でも「生と死」というような問題をきつと取り上げられているように理解するのです。

この死ということは、抽象論で考えても仕様がなないと私は思うんです。具体的な問題として考えなければ仕様がな

いんじゃないかと。具体的な問題として考えるということはどういうことかとというと、具体的な死というのは、まず、他人の死ということがあります。それから、自分の肉親の死ということ、それから、自分自身の死と、そういう具体的な問題としては、その三つに分かれてくるのです。

で、死という現象は同じだといえれば同じなですけれども、しかし、やっぱり他人の死ということになりますと、やはり意識としては違ってくると思います。対岸の火事ということがありますが、向こう三軒両隣でどなたかお亡くなりになると、本当に心からお悔やみ申し上げますというけれども、三日も経てばそれは忘れちゃうのです。

だが、自分の家族、肉親の死ということはそのはいかないです。三日経てば忘れるというわけにはいかないのです。これはきつと皆さんもご経験があると思いますが、私もどうもこの二〜三年ついていなくて、去年は私自ら死にそなうて腹を切つて、入院してやがて一年になるのですが、その前の年には八八歳の母を亡くしました。それは二年前。それから三年前は私の娘、二女ですが、二三歳で事故で死んだのです。二年間続いて、自分の娘と母親の臨終というものをみて、これは他人の死と全く違うんです。それが証拠には、今年で厚生省は遺骨収集を止めようというわけで、各地に

遺骨収集団が出ております。遺骨収集の中には遺族の方もおられるし、かつて、その土地に、戦争時代にです。銃を取って働いておられた方もおられ、そういう方が一緒にやっているわけです。ここの所を掘れば遺骨がある筈だということで掘るんですけども、仲々に出ない。肉親でない方は、掘っても出てこないとかたびれて止めてしまっんです。ところが、肉親が、肉親といったって、小さい時にお父さんが戦争に行っちゃった、そういう子供さんですが、そういう子供は、やはり自分の父がここに埋まっているということになると、本当に真剣に掘るそうです。夜暗くなっても遺骨を掘り当てようとして努力すると。しかも、大体調査した上で、見当を付けているわけです。一メートル置きとか、二メートル間隔、ところがなかなかそこを掘ってもないことがあります。そうすると、遺族の人はその間、非常に気がかりでよく寝られなかつたりする。そして、夢にお告げがあったというので翌朝、そこから一メートル半掘れば遺骨があるということを知った。で、そこを掘ってくれという通りにすると遺骨が出たという話があるのです。

私は霊感が絶対にあるということをお願いしているわけではないのですが、つまり、他人の死と肉親の死というのは、遺骨収集の時にでも違っているということを、具体的に申し上げているのです。

他人の死でも肉親の死であっても、自分以外の死なんです。自分の死ということになると、蜀山人の歌がありました、「今までは人のことかと思いに、オレの番とはこいつ堪らん」と、蜀山人一流の表現で、今までは人のことかと思いに、オレの番と

はこいつ堪らんという、これは全く実感であります。堪まらんどころでは片付けられない大問題なのです。その大問題、そういう風に批判出来るというのはかなり余裕があるので、実際に追い込まれてみると、そんな余裕のあるもんじゃありません。自分の死の問題ということになりますと、まず、死の恐怖といいますか、死が怖いということが実感として迫ってまいります。

その死が恐いということは、その死ぬ前に、病気という嫌なことが出て参ります。仮に、突然に死んだって、バタン、キューってわけには行かないんです。死ぬまでには何分か、何秒か苦しまなければならぬんです。そういうことで、一般的に申しますと、病気の苦しみというのがあります。死ぬことはいいけれども病気では苦しみたくないと考える。願わくば脳溢血か心臓麻痺で直ぐ死にたいとかいうのですが、その時の苦しみはなかなか大変らしいのです。実は私も死んだことはないのですけれどもなかなか苦しいようです。それは、死の瞬間の苦しみというのがありまして、呼吸が止まる、その苦しみなんです。

私共は、むせた時に苦しみます。あれの数倍の苦しみが呼吸の止まる苦しみなんです。これが死の瞬間の苦しみ。それに先行するものは病気の苦しみというものがある。それから、更に何となく死後の不安ということがあるのです。その死後の不安という問題があります。中村正堯という愛知県に生まれたお医者さまで、一九六五年癌で亡くなられた方の手記がありまして、その中の一説をちよつと読ませていただきます。

『死に対する必要な覚悟といて、人それぞれで違いもある。私の場合は次の四つ

が問題になる。一つは悟ったつもりでも死そのものに対する漠然たる不安感があるという。それから二つは、女房、子供を残して先に死ぬという後のことの気懸かり、これは人間として当然です。そういう心配がある。三つに自分にはまだ生きて、やりたいたいという未練がある。四つには肉体的な苦痛というものがある。特に悟ったつもりでも、死そのものに対する漠然たる不安感というのが絶えずまつわりついていて、なかなか離れないということ』を書いておられます。これは実感だと思えます。

先程申しましたアメリカの医者でキユーブラ・ロスという人がいます。その著書に、「死にいく人々の対話」という本があります。これは、もう駄目だといって、死を宣告された患者を一三〇人位丹念に面接した記録です。それによりますと、第一の段階では、もうあなたは駄目だというようなことを言いますと、そんな馬鹿なことはないと言って言う。それを否定的に受け取る。その次は非常に怒る。何だ、勝手なことを云って、医者の手当が悪いので俺は死んじやうんだというように。しかし、だんだん病気が進んでくると非常に憂鬱になるそうです。それから、最後になりますと、だんだん身体もだるくなってくるし、いよいよこれは駄目かなと悟って、不承不承ながら死を受容する。それでも二〇パーセントの人は最後までなかなか死を認めることが出来ない。まあ、いわば迷って出てくるような、そういうようなキモチで亡くなる方があるという話です。これは非常に貴重な記録なんです。一〇年位前に読売新聞社から出たのです。この記録が物語るように、死後の不安あるいは死の受容ということは、なかなか

か口で言うようなわけにはいかないということがおわかりになると思えます。

しからば、死の受容ということ、どのように人々は認めてきたのかということをお話した方が早いと思えます。例えば、芭蕉の臨終の句と称するものがありまして、「か旅に病んで夢は枯野をかけめぐるといふ有名な句がありますが、これは、色々に説明されておるようですが、要するに人生は旅であり、死とは眠りであるという考え方が含まれております。しかし、その裏には芭蕉なりに自然を眺め来った自分の人生から、一つの達観が滲み出ている句であるといふうにいわれているのです。

なかなかこういふうに「旅に病み、夢は旅野を駆けめぐるといふうな気持ちでは死ねないんです。なぜならば、私共は大体死というものについては余り直接にぶつかる機会が少ないのです。内科の医者が一番関わることが多いが、小児科の医者はあまりないようです。内科の医者、それから外科の医者などが、臨終に会うことが多いようです。

お墓があるお寺では、もう亡くなりましてからと言って、亡くなってから電話がかかってきてお葬式に行くんです。ところが、キリスト教の場合は、亡くなる前に、もう病院で臨終近いという時に牧師さんが呼ばれて、バイブルの一節を読まず習慣がありません。それで、心静かに息を引き取るようなふうには、牧師さんが臨終の枕辺に立ち会うことになっています。従って、キリスト教の影響によって、アメリカの仏教界では、日本のお坊さんとは違う点があります。日本のお坊さんは息を引き取ってから電話がかかってくるのですが、向こうは息のある

うちに電話がかかってくるので自動車で飛んでいかなければならない、そういうキリスト教の影響によって、アメリカの看護婦の教科書を見ますと、牧師さんを呼びなさいということが必ず書いてある。これは、日本の看護婦の教科書には、そういうことは書いてありません。確かに非常に、違点だと思えます。で、私共がたまに親戚などの臨終に立ち会いますと、皆さんご経験がおありだと思いますが、思いを残しながら死んでいくことが多い上にさらに、苦しみが加わってきます。綿を口のまわりに湿らしながら、最後を見取るわけです。そして、息を引き取る時に、家族の人が「お父ちゃん、死んじやいや」なんてかじりつくんです。すると、死んだ方が、目を見張ることがあるんです。私はそういうこと一度ぶつかりました。折角、思いを残しながらも死んでいく時に、お父ちゃん死んじや嫌だという叫びをあげたい気持ちに分かるけれども、折角死んでいく時になぜまた目を見張らせるのかと思うと、何か悲しくなつたんです。

それで、自分自身の臨終もそうですが、他人の臨終もです。いかに人を死なせてあげるか、いかにして自分が死ぬかということになります。生と死という問題を具体的に考えるには必要なことです。日本では「臨終指南」という本がございます。チベットでも臨終書という非常に短い本があるんです。

で、日本の場合は別時念仏ということになるのですけれども、息を引き取る時は香を焚いたり、周囲をきれいに片づけて、心静かに最後の生の息を引き取るようにしなければいけないということを詳細に書いて

あるのです。

これは、私は本当に一度だけですけれども、親戚のそういう時に立ち会いました、やはり折角死ぬ時にはそういう心配りを生きておる我々がしなくてはいけないと感じたことがあります。ある意味では亡くなつていく方に対する最後の心遣いだと思つています。そういうことをさせてあげなくてはいけないような気がするし、又、自分自身も死ぬ時にはそういうような心ぐみが必要だということを考えておるのです。

で、死の受容ということは、どのように考えられているかという問題であります。たとえば、キリスト教の信者の方々は、精神が肉体から解放されて、神の天国へ昇天するんだと理解する。死というものに対して、つまり、この肉体は亡んでも神の所にお召しになっていくんだということで、別れる悲しみはあるけれども、神の所に召される喜びというものを感じて、その死というものの受容をしていく。これがキリスト教の信仰に基づく死の受容であります。

それから、ギリシャの哲学者プラトンも、まあ大体同じような考え方に立って、靈魂が不死の世界へいくんだとっております。その裏には神は、死なないものつまり、不死なる存在であるんだという考え方があります。ハイデッカーが神は不死の存在であるけれども、人間は死への存在であるという。

近代的な思考というものは、キリスト教の社会においても、神が既に不死なるものではないと考えられます。何故なら人間の靈魂が不死の世界に行くという考え方に於いて、キリスト教信者が皆、死を受容しているかという、そういうわけにはいかな

いようです。それは、先ほどのキープロス  
のアメリカの病院の記録でわかるわけです。  
そこで、この死という問題に、あるいは、  
死の受容ということに関係が出てくる死後  
どうなるかという疑問があるのです。これ  
は皆さんもそれぞれお考えがあると思いま  
すが、私は先程申し上げましたように、子  
供の時に何度も死に損ないまして、生きて  
いるのが不思議な位に身体が弱かったわけ  
ですが、そういうことから申しますと、熱  
が高く、喉が渴いて苦しくて、何か穴蔵  
の中に引き込まれるような、そういう意識  
が遠くなるという気持ちを経験したことが  
あります。あるいは、何か暗い夜道をとぼ  
とぼ歩くような、何か非常に寂しい心細い、  
そういう感じで、子供心に死というものを  
考えたことがあります。

果たせるかな、四国のお遍路さんが同行  
二人と書きます。同行二人、つまり方々を  
廻るのに自分一人では心細いと、人間とい  
うものは非常に弱いものですから、一人じ  
や恐いというわけです。お大師様と一緒に  
らば心強いというので、笠に同行二人つま  
りお大師様が一緒だという意味で、同行二  
人と書いてあります。それは、やはり人間  
の弱さというか、一人では寂しいとそうい  
うものを表している。それじゃ、三人で死  
ねばいいかというと、これもそうもいかな  
いんです。一人では嫌だから三人で死ぬば  
販やかでいいってわけにも行きません。ま  
さか、外国旅行するわけじゃあるまいし、  
多勢で行けばいいというもんじゃない。外  
国旅行の場合は一人で旅行すると、私も経  
験があるんですが大変なのです。一人では  
ぐれても、分からなくなってしまう。一〇  
人束になっていれば、まさか一〇人が一緒

にはぐれた場合に社会は黙っていませんか  
ら、そういう点は仲間がいると強いんです。  
一人というものは旅行する時も心細いん  
ですが、死ぬ時はなお心細い。といって仲間  
と一緒に死ぬばいいかというと、そういう  
わけにはいかないんです。

要するに、死ということは、何か暗いと  
ころに引き込まれるという感じがあるん  
です。そういう人間の実感は私だけではな  
く、きつと多くの人々はお持ちになると思  
うんです。この阿弥陀様のことを「無量光  
」という言葉と「無量寿」という二つの言葉  
で呼んでおります。この無量光というのは、  
無量の光とは *amitābha* (アミターバ) とい  
うんです。数えきれない程の光のあるもの  
という意味なんです。

この阿弥陀様のことを阿弥陀婆  
(*amitābhā*) と呼ぶと共に *amitāyusa* (ア  
ミターユス) ともいう。これは無量寿とい  
う意味です。この無量寿という考え方は、  
我々のように有限の肉体と能力というもの  
だという反省から、無限を追求するという  
ことです。

死後の世界というのは、何か暗い世界だ  
という印象があります。このような嫌なも  
のではなしに、明るい世界へ死後に行ける  
という人間意識が働いているのが極楽往生  
という考え方です。阿弥陀様にこのように  
*amitābha* と *amitāyus* という二つの名前があ  
るのには仏教学としては議論もありますけれ  
ども、こういうような名前で、死後の仏様  
として一番関係の深い阿弥陀様がおられる  
ことは、何か分かるような気がするんです。

そこで、その死というものと生というも  
のをどう考えるかというわけですが、例え  
ば、キリスト教で申しますと、肉体から精



神が解放されるとか、神の世界へ行くんだと、考え、あるいは、プラトンは魂が節の世界へ行くんだという。そういうような考え方は、いずれも死の世界と生の世界が違うもんだという考え方なんです。死の世界と生の世界は違うんだと。それから、先程もちよつと読みました中村堯さんの著書の中には死は眠りだという言葉で、理解している。それから、岸本先生は死とは別れの時であると表現しておられる。その一説を読みますと、『私は七年の間、癌のために死の問題と戦い過ぎてきた。それまでの私は正直に言つて死から一生懸命目を背けてきたと言つてよい。死を見ないようにして、残された生命の時間を出来るだけ有効に使うとした。そのために、激しく激しく生きてきた。しかし、死は別れの時であるということを知つてからは、がむしやらに働いてきた自分を反省し、もう少し静かに人生を暮らしていく方が本当ではないかと考えるようになった。私は今その辺に立っている。この別れの時のあることを思うと、自分の日々の生活に対する態度も自ら身の引き締まるのを覚えているのである。本当に良く人生を送つていくことが出来れば、それは癌のお陰であると自分は感じる』。これは昭和三六年七月一六日にNHKで放送をして、非常に社会的な反響を起こした岸本先生の死との対決の一節です。しかし、仏教の方ではその生と死というものをどのように説明するかということが問題となります。仏教といいますが、先程もいいたように非常に長い歴史がありまして、一つ一つ丹念にお話しを申し上げることは、なかなかお聞きになる方も大変だし、繁雑ですから、いくつか拾つてお話ししますと、

大体わかりやすいのは禅宗の方です。生死一如ということを言います。あるいは、生死を越えるというようなことを言われている。で、これは具体的にはどういふことかと言いますと、昭和四九年の八月二十九日に南禅寺の管長の柴山全慶という方が亡くなった、その死因は私と同じ胆嚢炎なんです。私はそれまで胆嚢を切るつもりもなかったんですけども、去年の夏、柴山全慶老師が亡くなったものだから、こいつは堪らんと思ひまして、それで、去年の一〇月、痛くもないのに胆嚢を取つて、胆石二つ三つ出してきました。何十万円かの手術費を出したのですから、この一つが五万円に相当します。その金はともかく、うっかり腹を切るもんじやないと思つたのは、その手術の予後というのが非常に面倒くさくて、もう一年になるのですが、未だにどうも調子が出ない。私が腹を切るようになったのも柴山全慶さんが去年の八月二十九日に八二歳で亡くなったことに関係があります。

この方が亡くなる直前に八月二二日に書いてあつた言葉だといふんですが、「生きる時には生きるのが宜しく、死ぬ時は死ぬが宜しく候」と手帖に書いてある。まあ、これが最後の言葉だと言われています。生きる時には一生懸命に生きて、死ぬ時は死んでしまふというわけです。もう柴山全慶老師みたいに長年禅で鍛え、色々ご苦労されているから、こつこつ境地になるんです。駆け出しの人間ではそこまで行けたもんじやないんです。ここまで行くに、どうすればいいかというと、後程申し上げますが、これがやはり禅宗の激しい修行によつて、生死を越えるという境地になりきることで、人間はどうせ死ぬんだから、そのまん

ま素直に死ぬ時は死ぬと共に、生きる時は生きる、良寛和尚が同じようなことを言っておりまして、良寛の法語というもので、『災難に遭う時には災難に遭うが良い、死ぬ時は死ぬが良い』、これが災難や死を免れる秘訣であるというんです。素直にこういう風になれと言うんですけれども、これも、わかっちゃいるけれど止められない、カッパえびせんみたいなもので、なかなか生の欲望というか、それは人間の本能ですから、この生きたいという気持ちは、そう簡単に素直な境地には立ち入られないわけです。しかし、何らかの方法をもってすれば、そういう境地に近づくことは出来るわけです。

それから、徒然草の吉田兼好、という歴史上の有名な人物で、この徒然草の第九三段に、こういう風に書いてある。『されば、死を憎まば生を愛すべし。存命の喜び、日々に樂しまざらんや。愚かなる人はこの樂しみを忘れて、いたずらに外の樂しみを求める。人みな生を樂しまざるは死を恐れざるが故なり、死を恐れざるにはあらず、終わりの近きを忘れるなり。』と述べております。つまり、この徒然草に出ている兼好法師の死というものに対する態度は、生きるすなわち生を樂しむということです。これが、その死というものに見する一つの鍵であるということを行っています。これはご存じのように、非常に仏教的な理解の上に立つての徒然草なので、このように、作品に現れた生死観です。更に、この仏教の中にもいろんな考え方があります。有名な言葉に、煩惱即菩提とか生死即涅槃というのがあります。これは既にどなたかがお話しになったことだと思いますが、漢光類聚とい

う本でありまして、日本のかなり有名な仏書です。それによりまして、一念三千と申しまして、地獄・餓鬼・畜生・人天修羅で、六道、それに声聞縁覺・菩薩・仏を加えて、世界がある。しかも、一つ一つの世界にそれぞれ一〇ある。百界となり。百界の一つ一つに十如があるので合計千となる。しかも衆生、国土、五陰の三世間があるので三千になる。生という現象も、この世の全ての現象の一つであると、死ということもこの世の現象の一つである。従って生にも三千愚息、涅槃も三千具足するのだという意味で、生死即涅槃であるという。その前後を読みますと、つまり、生死流転してこの死、生ということに、殊に死ということにかかわるのは、天台的に申しますと、空仮中の三諦という、悟りを知らない迷によって起きる。だから、生死即涅槃という気持ちになれば嫌うべき生死もなく、願うべき涅槃もない人だという、諸法実相という法華經の考え方から発展したものです。また、「生死覺用抄」には、「生死一体にして空有は不二なり、此の如く知見し此の如く解脱すれば心仏の体顯れて生死自在なり」と述べております。いずれもその生死とか迷悟とかという対立する二つの考え方をやめて、総べて法華經という諸法実相として受け取る。この総べてを宇宙の現象の一つとして捉えて、しかも一つ一つを絶対肯定しようという態度が出ている言葉です。

しかし、「ここまで行くには大変なんです。今、天台教学の文献について申しました。お釈迦様が説かれた言葉として一番古いものと考えられる文献に、「ダンマパダ」とか「スッタニパータ」とか「ウダーナ」という三つが残っていると云われる。その三つ

の文献。その中の、例えば「スツタニパータ」の中には、死ぬよりも前に愛着を離れ、過去にこだわることなく、現在においてもこせこせと思いつらすることなかれど。要するに、死ぬという意識、あるいは執着というものを離れて生活をしろということをしていて。それから、「ウダーナ」という文献の中には、生きていて、もしも苦しまなければ、死の終わりにも悲しむことはない。つまり、毎日毎日を充実のある生活をすれば、死というものは悲しむべきことではないんだということを説いているんです。

果たせるかな、戦国時代の名医である直瀬道三という人は「養生するは死をよくせんためなり」と。生を養うということは死をよくせんがためであると。「不養生のものは死する時に気抜けてうるたえまわり、よく死ぬことは出来ぬものなり」と書いてあります。つまり、生を大切にすることは死をよくすることであり不養生ということは、生を粗末に扱うことであり、同時に死に対してうるたえることになる。それから、仕事が多いとか使命感に追われることも結構ですが、過労で死ぬということも恥ずべきことであると、戒めている。人間は腹八分の生活をするのが良いということはお食べ物だけじゃなくて、毎日の生活においても、大事なことである。無理をすれば当然病気という問題、又は、死の瞬間を早めに迎えるということをしたものであります。

要するに、この死という問題は、やはり生という問題と非常に関わっているようです。いまの「ウダーナ」の言葉にいたしましても、兼好法師の徒然草にいたしまして

も直瀬道三の言葉にいたしまして、よく生きるということ、いかに生きるかが大事だと説いています。従って、平常に我々が丈夫な内にいかに生きるかということを考えておかないと、死ということにぶつかつた時にうるたえてしまうことになるのです。

で、いかに生きるかということは、これは実はこれだけ話しても、一時間も話さなければならぬかも知れませんが、なかなかこれもむづかしいことなんです。それぞれの人格が各別であり、また、それぞれの人の人生があるわけです。例えば、日本の各宗の祖師のように、例えば法然上人は念仏を唱えるということが、法然上人の人生なんです。念仏を唱えることで総べてをそこに解決されておると。そういう一つの自分の使命感なり、宗教的境地に達すれば、実に立派なものです。それから、比叡山を開かれた伝教大師最澄が亡くなる時に遺言を書いておられます。実は遺言を二度書いているんです。あの方は肺病、結核で五六歳(又は五七歳)で亡くなられています。晩年の一〇年間というのは非常に病身であった。従って、やはり死という問題に直面しておつたらしく、亡くなる一〇年位前に一度遺言を書いており、また亡くなる年に書いているのです。

ところで、遺言という事は徳川時代の商家のご主人とか、戦国時代の武将とか、それから、各宗のえらいお坊さんなど、殊に禅宗関係のお坊さんの遺言を色々拝見いたして次のようなことがわかりました。

大体遺言というのは二つありまして、一つは、自分の死後の色々な問題、財産をどうするかといった自分の後の問題を書いて

あるものがあります。もう一つは、自分が今まで生きてきた生活経験に基づいて、人生を斯くの如く生きるべしということを書いてあるのです。こちらの遺言の方が私には非常にためになる。仏教の話ということとなく抽象的な議論になり易いものでありません。煩惱即菩提とか、生死即涅槃という具合に、このような抽象論を理解出来る人は一、〇〇〇万人に十人位しかないでしょう。

その最澄が死ぬ年に書かれた遺言の中に一〇ヶ条ありまして、その二番目に、「用心」、心を用いると書いてある。伝教大師最澄はさすがに天台法華宗という宗旨を開かれた位で、これは仏教思想講座の第六巻に、仏教の人世論というところに私がちよっと書いているのですが、それは第一、用心なりとありまして、初めに、如来の室に入り、次に如来の衣を着、終わりに如来の座に坐せよと書いてあるんです。これは法華経の經典の中にある言葉で、「大慈悲心」、「柔和忍辱心」忍辱とは我慢するというくらい態度ということ。それから、第三は「一切法空」捉われない気持ちです。人に対してはその慈悲の気持ちで人に接するということが大慈悲心です。その最澄の場合には、その慈悲というのは悪事をおのれに迎え、好事を他人に与えるのが慈悲の根本です。個人主義的な現代人と反対です。良いことは自分に来て、悪いことは向こうへやつちやうと現代人は考えるようです。伝教大師は悪事は自分に迎え、好事を他人に与える、それが慈悲の極みであると。それは比叡山の中にそういう格言みたいなポスターを貼ってあるのを見て、ある人がこれは天下の大馬鹿者なりと傍に説明書きをした

そうです。現代の意識からいえばよいことは自分の方に来させ、悪いことは向こうに行けと考えるのはわかるけれども、その反対な考え方はまさに天下の大馬鹿者だというわけです。しかしよくよく世の中を考えしてみると、個人主義で凝り固まるのは良くないということがわかります。伝教大師の好事を他に与えて、悪事を自分に迎えるというのが慈悲の極みであるという考えを、深くかみしめる必要があります。

これは他の言葉で申しますと、人のお世話にならずに、人のお世話をしてそして報いを求めないようなことを目指して生活することです。具体的にいえば、時間とかお金とかの処理を明らかにし、しかし人に対して公平にやりたいという気持ちです。私はこの気持ちで生活しておるんです。人の世話にならずに人のお世話をして、報いを求めないことは何でもない言葉ですが、その実践をすることが、その慈悲の極みであると理解しております。

その最澄は亡くなる時に、この慈悲ということと共に柔和忍辱、やさしく我慢することを説いています。現代人に一番欠けていることは我慢ということなんです。高度経済成長で、蝶よ花よというふうに住生活してきますから、殊に若い人は、非常に我慢をいうものが欠けております。今に食糧が不足になったら、我々が死んで二〇年位経てばどういことになるのか、我々が戦争中に苦しんだ以上の苦しみをすることも知れないと思うんです。それはその時になつてみなくてはわからないんです。とにかく、日常よく使われています、ティッシュペーパーっていうものは便利だとは思いますが、もったいなくて仕方がない。我々小僧で生

活して、お寺で朝晩、お味噌醬油をかき混ぜさせられました。それで、炊事をやるのです。小学生の小僧たちは裸まで、水の加減をやり、火を燃してご飯を炊きます。初めチヨ口チヨ口中パツパとやるわけです。それが小学校です。そこいら辺の掃除もします、掃除が終わると大僧がやって来まして、「掃除した、どうして障子の機に、何だ、こんな埃があるじゃないか」と怒鳴ります。今どこのお宅でも障子の機に埃のない家なんてありやしないと思うんです。しかもお米をとぐといったって二燭です。二燭という言葉のわかる人はもう六十歳近い方でないとは解らないでしょう。二燭の電気でお米をとぐんですから。こぼれた米粒がわからないんです。それでも、一粒でも二粒でも落つこちていようものなら、小僧ならぬ大僧が来まして、「誰だ米をといだのは」なんて、バタバタ薪鉄砲でぶっ叩かれるんです。

お経を読む時も煙管かなんか持ちまして、間違えると煙管で打たれる。僕はあれで打たれていなければ、今自分、ノーベル賞か何かもらったのではないかと思えます。大変な秀才であつたかも知れないんですが、あんまり打たれちゃつたので、凡人の嬉しさを味わうことになつたんじゃないかと思えます。とにかく、そういうことで小学校から帰ってきたって遊ぶ暇はないです。薪を取りに行つたり、水を汲みに行つたり、大変に忙しい小僧生活を体験しました。

ところでいかに生きるかということに実は関係あるんですけれども、欲望に躍らされているのは人間の姿です。従つていかに生きるかという中には、そういう欲望をどうするかという問題があるわけです。

仏教は一つの面からいえば生死というこ

とをどう受容するかという問題、それから、もう一つの面からいえば、人間の欲望にどう対処するかというのが、仏教の悟りに関わりがあります。これは抽象的な表現なんです。具体的には死という問題、生という問題をどうするか、人間の欲望をどうするかということが、仏教のある意味での柱になつていゝんです。伝教大師が死ぬ最後の時に臨終の言に、柔和忍辱心、慈悲心それから、こだわらない心、これは法華經の經文を引いて書いております。これは、いかに生きるか、自分はいかに生きたかということの一つの生きる態度を示したんです。具体的には、その天台法華宗というもの、本当の大事な仏教を日本に広めようとするかということの一つの使命感に燃えているわけです。

それから、最近、正岡子規の晩年の書を読みまして、私も非常に驚いたんですが、正岡子規については歌などおやりの方はよくご存じで、その方々にはむしろ私よりご存じだと思えますが、二三歳で肺病になつて三六で亡くなつた。それで、晩年は本当に病気の苦しみとか、死にたくないということ、大変な苦悶の中で歌を作つております。それで、病床六尺という中には、こんな苦しいのを何とかしてくれというようなことを訴えているんです。しかし、最後の八ヶ月位は殆ど昏睡状態になるんですが、その前にはモルヒネを飲みながらも、本当の和歌というもの、歌の道を書いております。「ほととぎす」という雑誌に投稿しながら、昔の日本の歌というものは非常に墮落してきているから、自分が出て、本当に日本の歌の世界というものを本来の姿にしたという、使命感、人世の目的、そういう

ものに一生を捧げています。

従って、こういうえらい伝教大師とか、法然上人とか、正岡子規みたいに図抜けた人は、そういう一つの人生観を持ち、一つの生活の目標というものを持ち続けて、充実のある生を送っているわけです。

しかし、なかなか、普通の方はそういうわけにはいかないわけです。ですから、私は、それぞれ人々格別で、一〇の能力のある方もあれば、七の能力のある方もあれば、六の能力のある方もありますが、その能力と生活の違いによって色々であるけれども、自分なりの最善を尽くして行く。それは、社会的な奉仕でも結構だし、趣味の世界でも結構ですし、又、家族のためでも結構ですが、少なくとも自分以外のことには激しい生の力を燃やすという、生活をするということがいかに生きるかということの一つの目安になると思います。自分のことだけに関わっておっては、いかに生きるかということについて十分な解答は出ないようです。何か自分以外の他人の問題に自分の生きる力を捧げるといふ、そういうことにおいて、毎日毎日の生活が充実していくことが出来るならばこの死ということに臨んでも、そう慌てふためかないで、死というものは迎えられるんではなかるうかというように考えております。

皆さん方、私より更に更に深い人生経験をお持ちでございまして、私の話はあまりにも当たり前だというようなご批判も受けるかも知れませんが、私は今日は率直に申しまして、そういうような気持ちで暮らしていることが、自分の死という問題に関わる一つの自分の生活態度だろうと思うのです。更に更に色々人生的な苦難を乗り越え

れば、違った境地になるかも知れませんが、先人のものをよみながらその辺を更に深めていくことが死という問題に対する解答になるだろうと考えているわけです。